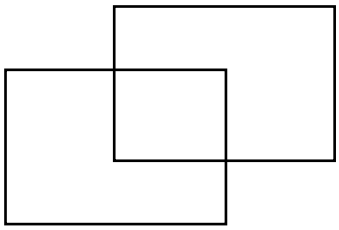
ニイニイゼミ

相地　満



ゴロゼミ　ゴットン　土の中から這い出して
梅の樹　柿の樹　蜜柑の樹
また幼木の桜の樹
ゴロゼミ　鋭い鎌をもち　やっと根元にたどり着く
でも木登りは大変だ
樹皮に二本の鎌をかけ　四本の足でしがみつく
落ちはしないか　ゴロゼミ　ゴットン
たかいとこまで登るのやめよう
暫く休憩　土乾く
何れ背が割れ、中から白い虫が出る
秘密の衣をまとい出る
ニイニイゼミの誕生だ
色づくからだが　しっかり固まり
いきなり「ぱっと」飛んで行く
やがてどこかの森蔭で　シイイと静かな声がする
蝉のしぐれに　似合わない　聞き落とされることもある
でも耳傾けば真剣に　一生懸命鳴いている
その心伝わり　声かける
ゴロゼミ　ゴットン　よかったね

　セミの幼虫に対する呼び名は多くある。セミ全体を指しているものがあれば、限られた種類を指しているものもある。「ゴロゼミ」は巣穴の口元でのぞいているもの。地面を歩いているもの。あるいは樹に止まっているものなどをいう。「ゴットン」はニイニイゼミの幼虫のこと。はじめ地方区の呼び名であったが、のちに全国区の呼び名に。民俗呼称、方言語彙などがなくなってきている現在、夏の情緒も滅びはじめた。「木に登っていた一匹のゴットン 中にいたセミはもういない　昭和 56 年・五年生男児」。この子は他校からの転入生である。転校してきた地域にニイニイゼミの幼虫をゴットンと呼ぶ習俗はなかった。だが、この詩により一気に広まった。身近な生き物に囲まれて生活している子どもたちの命名の仕方は多様でおもしろい。

蟪蛄

ニイニイゼミにあてられる漢字は蟪蛄である。まずは読めない。幼い頃であったなら私はそれを「しっこ」と呼んでいただろう。本が好きで、やたら開いて読んでいた。とくに図鑑や絵本、新聞などの広告を見るのが大好きであった。広告の裏は白紙になっている。そこは絶好の落書き天国であった。それらの紙には絵と同時に大小の文字がたくさん書いてある。「五十音表」が大好きで何度も何度も眺め、見つめ、いろいろに読んでいた。はじめから読むだけではなく、うしろから読んだり、ななめに読んだり、とびとびに読んだり……。それが私の大好きな一人遊びであった。文もさかんに読んだ。漢字は苦手で飛ばして読んだが、いつの間にか当て字で読むようになっていた。それが真っ当な読み方である場合が多かった。想像して読むということが楽しくて大好きだった。時折見かけるルビのある文字の読みとともに、私は我流の読みをして不自由なく文を読んでいた。

〇〇が何故、「しっこ」なのかというと、ニイニイゼミは、ほかのセミと同じように、慌てて樹を離れ飛び立つとき、しっこをする。少量であるが。ニイニイゼミは子どもの背丈くらいの場所に止まっていることが多かった。ゆえに、それがよく顔にかかる。そこで、しっこがよけい強く印象づけられる。虫へんのつくりに「古 (こ)」が記される。自然と子ども心に「しっこ」の読みを連想する。ところで蟪蛄とは何のことだろう。調べてみると「けいこ」とあった。

詩「ごろぜみ」新美南吉

ごろぜみ、ごつとん でろよ。/ 月夜に、つちから でろよ。/ 合歓の木、ねもとは にほふよ、
/ 花だか、土 だか にほふよ。/ ごろぜみ、ころもを ぬげよ。 / 月夜は、つーいと なけよ。

「ごろぜみ」作者：新美南吉／ 1932 年 11 月

半田市岩滑は新美南吉生誕の地であり、終焉の地である。その故郷の地においてつくられた上記の詩は素朴である。この場合の「ごろぜみ、ごっとん」がニイニイゼミであるかどうかはわからない。ただ土のにおいが色濃く薫ることなどから、限りなくニイニイゼミに近いと思われる。幼虫のぬけがらに土がまとわりつくのはニイニイゼミの特徴である。その小さく丸っぽい姿形もごっとんの響きにあう。土にあけられた穴から這い出そうとしている今、その土臭い趣に快くも神秘な彩が添えられる。月の光、夏に咲く合歓の花、その落花だか、根元だか、土やさまざまな匂いに包まれている。その中での土臭い脱皮が神秘のベールに包まれている。土俗と神秘が入り混じる南吉詩の姿がしのびだされる。「ころもをぬげよ」とは「殻を割って出よ」という意味だろうか。脱皮後、「真白く縮んだ翅をしっかり伸ばせ」という意味なのか。「つーい」と鳴くその主体はなんだろう。さらりと読み過ごせない不思議な印象をもった詩である。「ごろぜみ、ごっとん」とは童謡や童詩の流行とともに全国化した呼称なのかもしれない。

＜採　集＞

セミの多くは木の高い所にとまって鳴く。そのため、採るには木の枝や竹の竿を使った。木の枝の場合は先が二股になっているものを探し、二股の部分にクモの巣をあてて糸を巻き取って網状にした。それをセミにあて、くっつける。意外とよく採れた。くるまったセミをつかみ、ねばる糸を取りのぞくときれいなセミが手に入る。だが二股の部分に巻きつけて取るクモの巣の量はけっこうたくさんいる。クモの巣があたりに少なくなるとともに、この採り方は非現実的なものになっていった。

そこで、竹の先にとりもちをつけ、セミをくっつけて採る方法が子どもたちには一般的であった。街でとりもちを手にいれることは容易ではない。できても高価である。そこで持ち出したのがハエとり紙である。ハエとり紙には二つのタイプがあった。一つはテープ状の紙をコイルしたもの。コイルの一端をひっぱって伸ばし、天井や梁に取り付けて吊るす。何本も垂らしておくと、空中を飛ぶハエがくっついた。もう一つはシートに粘着液を塗りつけ、二枚を重ね合わせたもの。使用の際には一枚づつ広げて使う。テーブルや食器棚の上に置くとハエが止まる。足がくっついて動けなる。この粘着液を竹の先に塗りつけてセミを採る。セミの採り方のほとんどがこれであった。葉の多い所でも隙間から竹を伸ばし、セミに近づけて採る。よくとれた。だがこの場合、セミの体に粘着液がつく。ねばねばした液のついた羽根や体がくっついてお互いを損ねる。虫かごが汚れてしまう。

最良の方法は、口径が小さく、袋の長い補虫網である。だが補虫網は高価で、柄の長いものを手に入れることはなかなか難しい。結局は手づかみである。そっと忍び寄り、手でつかむ。名人と下手がいた。手づかみの場合、木の一番下にいるニイニイゼミが一番よくとれた。続いてツクツクボウシ、アブラゼミ、クマゼミの順であった。ニイニイゼミは幼児でもとれるので馬鹿にされていた。

都会からニイニゼミが姿を消して久しい。かわってアブラゼミ・クマゼミが木の下の方にいる。セミのぬけがら集めは楽しい。小さい子どもにも十分親しめる。同時にセミの生息調査にも役立つ。

＜飼　育＞

中学年生の頃、一緒に仲よく、セミ採りをしていた子がいた。その子ははんぱのないセミ採り名人だった。幼虫をたくさん集めて飼育もしていた。狭い貸家の玄関口にビンや缶をびっしりと並べて。土に穴をあけ、セミの幼虫を飼っていた。羽化のときの様子を熱っぽく話した。ともに高学年になった夏休み明け、たくさんの自由研究が学校に持ち込まれた。そのなかにセミの幼虫、羽化の順序を標本にして並べたものがあった。ドイツ箱に整然と配置された各種、セミの羽化実物標本。その作品は市の自由研究展に出品されることになった。幼虫飼育には暗い所がよいだろうと考えて、箪笥の引き出しのなかにびっしりと缶を敷きつめ、飼っていた子もいた。「上には上がいるものだ」と二人は呆れていた。夏は足早に去っていった。

PHOTO gallery

1

1. ニイニイゼミ

2. 樹についたぬけがら

3. 泥がついていないぬけがら

4. 羽化したてのニイニイゼミ

5. ニイニイゼミの森

2

3

4

5